

大学入学共通テストの傾向と対策（国語）

1. 共通テストの問題作成の方向性について

二〇二一年一月から新たに実施される「大学入学共通テスト（以下、「共通テスト）」については、次のような「問題作成の方向性」が公表されている。（二〇一八年六月）

【記述式問題の導入（国語）】

・記述式問題の導入に伴い解答時間が一〇〇分になる。

・マーク式問題の配点とは別に、記述式問題の段階別評価が示される。小問ごとに4段階表示、総合評価については八〇〜一二〇字程度を記述する小問についてのみ1.5倍の重み付けを行った上で5段階表示とするところが検討されている。

【マーク式問題における新たな解答形式】

・当てはまる選択肢を全て選択する問題・解答が前問の解答と連動し正答の組み合わせが複数ある問題などの新たな解答形式が検

討されている。

【問題作成の方向性（国語）】

・近代以降の文章（論理的な文章、文学的な文章、実用的な文章）、古典（古文、漢文）といった題材を対象とし、言語活動の過程を重視する。

・言語を手掛かりとしながら、与えられた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等にに応じて文章を書いたりすることなどを求める。

・大問ごとに固定化した分野から一つの題材で問題を作成するのではなく、分野を越えて題材を組み合わせたり、同一分野において複数の題材を組み合わせたりする問題も含まれる。

・記述式問題は、実用的な文章を主たる題材とするもの、論理的な文章を主たる題材とするもの又は両方を組み合わせたとし、小問3問からなる大問1問を出題する。
・テキストの内容や構造を把握・解釈すること

とや、その上で要旨を端的にまとめ、わかりやすく記述することを求める。

・小問3問は、解答字数二〇〜三〇字程度、四〇〜五〇字程度、八〇〜一二〇字程度をそれぞれ1問ずつ出題する。

*第2回試行調査の結果報告（二〇一九年四月公表）で、「上限字数のみを示す」という方針が出された。

2. 試行調査について

共通テストの開始に向けて、二回の試行調査（二〇一七年十一月・二〇一八年十一月）が実施されたが、特筆すべき内容としては、

- ◎記述式問題で、実用的な文章（第1回）、論理的な文章（第2回）がそれぞれ出題された。
- ◎記述式・マーク式を問わず、複数の文章・資料の読み比べ問題が課された。
- ◎小説枠（大問3）で詩が出題された。
- ◎会話文の読み取りを踏まえた問題が課された。といったことがあげられる。

大問5	大問4	大問3	大問2	大問1	第1回	第2回
<ul style="list-style-type: none"> ・漢文（『史記』）と、関連する漢詩を含む資料の読み比べ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・『源氏物語』に関する複数の古文（定本・注釈書）の読み比べ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・関連する二つの小説の読み比べ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・図表・写真を含む論説文の読解。 ・読み比べは無し。 	<ul style="list-style-type: none"> ・五〇字以内、二五字以内、八〇〜一二〇字以内。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実的な文章（生徒会部活動規約）と関連する図表資料、会話文の読み比べ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・言語に関する複数の評論文の読み比べ。 ・三〇字以内、四〇字以内、八〇〜一二〇字以内。
<ul style="list-style-type: none"> ・設問に「会話文を含む」。 	<ul style="list-style-type: none"> ・設問に「会話文を含む」。 	<ul style="list-style-type: none"> ・同一作者の詩とエッセイの読み比べ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・著作権に関する評論文と法令文（著作権法の抜粋）、関連資料の読み比べ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・著作権に関する評論文と法令文（著作権法の抜粋）、関連資料の読み比べ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・言語に関する複数の評論文の読み比べ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・故事成語に関する漢文の現代語訳と、漢文（『郁離子』）の読み比べ。

3. 傾向と対策について

ここまでの内容から、共通テストで注意すべき点は次の三つに集約することができる。

- (1) 記述式問題（大問1問）が増え、解答時間も二〇分増の計一〇〇分になる。
- (2) 記述式問題は、実的な文章または論理的な文章を主たる題材とし、マーク式問題とは別に段階別評価が適用される。
- (3) 分野を越えて題材を組み合わせたり（＝科目融合）、同一分野で複数の題材を組み合わせたりする（＝複数の題材の読み比べ）問題も含まれる。

(1) 記述式問題で求められるのは、「出題された文章・資料から条件に合う要素を抽出し、指定の字数にまとめる力」である。「要約力」を鍛える取り組みが、いっそう重要性を増すと考えられる。また、取りこぼしのないよう、適切な時間配分が不可欠であるのは従来どおり。特に記述式問題では、ただ解答を作成するだけでなく、自己採点用の解答を控えておくことも忘れてはならないため、試験全体として時間の余裕は見込めない。普段の記述練習から、解答時間を区切る・下書きをするなどの意識付けをさせるのが望ましい。

(2) 実的な文章とは、新聞記事や広告文、法令文、報告書などを指す。通常扱う文章題材とも多い。従来はあまり扱われてこなかった題材のため、大半の生徒は読み慣れていないはずである。教科書の表現分野の題材を活用するなどして、できるだけ実的な文章の特徴や読み方に慣れさせておくとういだろう。

(3) 異なる分野、あるいは同じ分野や共通するテーマの文章・資料を組み合わせた問題では、複数の文章・資料の内容を「いかに速く的確に読み比べることができるか」が大きなポイントである。さまざまな分野の文章にあたりながら、「速読力」と「大意把握力」を身につけさせることが必要になってくるだろう。

一方で、複数の文章・資料を読み比べるためには、当然ながら個々の文章・資料を正しく読み取ることが大前提となる。つまり、従来どおりの国語力——語彙や文法に関する知識、文章における指示内容や文意・文脈を読み取る力など——が必須であることは変わらない。新しい形式に惑わされずに確実に点を得るためには、基本的な「読解力」「語彙力」「文法力」をきちんと身につけさせることも肝要である。

（数研出版編集部）